

身延山大学京都特別公開講座（平成二十八年十二月二日）

遺文からみる日蓮聖人のおひとがら

木村 中 一

一、はじめに

皆さんは日蓮聖人をどのような方であったと受け止められているでしょうか。東国、現在の千葉県生まれということ、「東男」の堅く野性的なイメージを持つ方も多いのではないのでしょうか。また痛烈に諸宗を批判されることから非常に厳しい方であったといわれる人もあるかも知れませんが。私はこれらの意見に対して「実は柔和で優美な感性をお持ちの方であった」と強くお伝えしたいと思います。このイメージは聖人のお書きになった書（特に書状）を拝読すると理解することができます。確かに中には厳しく諫める言葉が多くならぶ書もあります。しかし一方では、やさしく婉やかな表現を用いられている書も多く存在するのです。聖人が様々な書に鏤めた「言葉」こそは、日蓮教学の根幹であると同時に、聖人その人であり、接する者の多くを深い感動に浸らせるのです。強く信仰を説く激しい文言の一方で、檀越の心に寄り添いながら、時には涙するその「おひとがら」は、様々な書の文言が見事に映し出し、「人間・日蓮」が現代に燦然と姿を現されるようであります。

今回、第二講と致しまして「遺文からみる日蓮聖人のおひとがら」と題して、書状に鏤められる文言より、聖人の人物像、おひとがらについて考えていきたいと思っております。

二、日蓮聖人の書蹟にふれる

・書蹟にふれる

聖人の記された書を総称して「御遺文」・「御妙判」・「聖教」・「祖書」などと称します。またその種類についてみると大きく五つに分類することができ、それは「著書」・「書状（消息・お手紙）」・「要文」・「凶録」・「写本」であります。聖人が記されたという点では「曼荼羅本尊」もこの分類に入ると考えられますが、「曼荼羅本尊」は信仰の対象であり、厳密にはその性質は異なるものと考えられますので、この分類からは外しております。今回はこの内の「著述」と「書状」を中心に話しを進めて参ります。

聖人はきわめて速筆で、瞬く間に一通の書状を書き上げられていたといわれています。それはまるで「大空を舞う龍」のような文字に現れており、非常に躍動感にあふれた文字にて人々を導いていたことがわかります。立正大学名誉教授の中尾 堯先生はこの点に関して、聖人は遺文を書く際に運筆がスムーズにいくように松煙墨（青墨）を使う傾向にあるとおっしゃっています。松煙墨とは松の根や皮を燃焼させ「すす」を採り、それをにかわで固めて作る墨で、青灰色を帯びた墨色であります。この墨は古くなるにしたがって墨色をさらに変化させ、一層青味が強くなるのが特徴で、ここに「青墨」ともいわれる所以があるのです。

・日蓮聖人が使用した料紙について

現存する聖人の著述や書状の多くは卷子になっています。そのため巻紙を片手に筆を走らせられたように思われがちであります。実際はそうではなく、現在の卷子体は後世の修復によるものがほとんどであります。それらが分かる理由としてあげられるのが、紙の継ぎ目に文字が渡っていないこと、さらに聖人自らが丁数を打たれていることであり、この丁数を打つことを「丁付」といいます。つまりこれらより聖人は、重ねられた紙に一枚一枚筆を走らせ、書をしたためていたことを知ることができます。さらにこの丁付には特徴がみられ、多くの書状の一紙目は左上に、二枚目以降には右上に丁付けがなされています。これより一

紙目は文章を書かれた後に丁数を打ち、二枚目以降には丁数を打った後に文章を、という書き方をなされていたことが分かります。

三、著述にみる聖人の想い

・『立正安国論』にみる天変地天に対するお考え

では、次に聖人の記された著述より聖人の想いについて著述の文言に注目して、激動の鎌倉期を過ごされた聖人の「時勢」に対するお考えについて、また特に「孝養」に対するお考えについてみていきたいと思えます。

聖人は出家地であった清澄寺を追われる形で離山し、まず政治の中心地であった鎌倉において法華経弘通を開始されます。その拠点は草庵があったとされる名越の松葉谷という所でした。ここは鎌倉幕府の、北条一門の有力氏族であった名越氏の邸宅などがあった場所とされ、鎌倉の要所ともいえるべき地であります。当時の布教内容は「法華経受持の勸奨」と「諸宗批判」、特に諸宗批判の矛先は法然浄土教と禪であったと伝わります。聖人が諸宗批判を繰り返されたその根拠について、宮崎英修先生は『日蓮辞典』において「諸宗立宗の祖師らは自らの意趣によって依経を選択しており、仏意に随順して見抜いたから」であると指摘されています。仏意とは釈尊が本当に言いたかった事、つまり釈尊の真意であり、諸宗の高僧らは自らの能力に依るべき経典を選択しているため、真意に背いているのだと聖人は諸宗の高僧らを断罪しているのです。

このような鎌倉での弘通の中、日本は様々な自然災害に直面するのでした。聖人が鎌倉に入られたこの頃を契機として日本各地で自然災害（天変地天）がうち続いており、これについては『立正安国論』の冒頭部分の、

旅客来嘆曰自近年至近日天変地天飢饉疫癘遍滿天下広迸地上。牛馬斃巷骸骨充路。招死之輩既超大半不悲之族敢無一人。

（定本 二〇九頁）

という有名な文にその惨状をみる事ができます。この『立正安国論』は主客問答体にて記されており、主人に対して旅客が「近年打ち続く災害がやむこと無く、鎌倉の大路小路には牛馬が倒れており、死人の骸骨が充ち満ちている。多くの人々は死を見ながら悲しみ苦しんでいる」と当時の状況を克明に告げています。ここに示される状態はまさに地獄の様態ともいえましょう。時の為政者は篤く仏教を外護し、多くの大寺院が建立されています。このように「仏都の觀」を呈している鎌倉であるにもかかわらず、民衆は苦しみにあえいでいる。この問題に聖人は仏教者として解答を出すために様々な經典の閲読をされるのであります。

当然、閲読は法華經を中心として行われたことでしょう。しかしそこに明らかな文証をみることはできず、「鎮護國家の經典」にまでその閲読範囲は及びます。そして『大集經』、『金光明經』、『般若經』、『藥師經』の閲読に及んで、救世の經典は正法『妙法蓮華經』であり、淨土教や禪の流行によって正法の流布が妨げられているために天変地夭が巷に蔓延るのだと見いだされたのでした。この発見こそが『立正安国論』の執筆動機であり、『守護國家論』、『災難興起由来』、『災難対治抄』を記した後、この三書が底本となり『立正安国論』が完成するのであります。この『立正安国論』は得宗被官であった宿屋入道最信を仲介として前執権北条時頼に提出されました。この『立正安国論』の要点内容を簡単に図式化すると、

正法廃棄↓悪法帰依↓善神捨国↓聖人辞処↓悪鬼跳梁↓災害続出

とすることができます。そして仏典に示される「三災七難」の内、既に五難は発生している。このまま悪法に帰依することを止めなければ残りの二難が必ず発生するであろうとするのです。ここにある悪法こそが巷で流行している「法然淨土教」であり、この流行により発生する残りの二難こそが「自界叛逆難（内乱の発生）」と「他国侵逼難（外国からの侵略）」であるとするのです。そして、

汝早改信仰之寸心速帰実乘之一善。然則三界皆仏国也。仏国其衰哉。十方悉宝土也。宝土何壊哉。国無衰微土無破壊身是安
全心是禪定。此詞此言可信可崇矣。

（定本 二二六頁）

と記され、「人々は信仰の矛先を悪法（法然淨土教）より正法である法華經へむけなければならない。もし皆が法華經信仰に邁進

することができればこの世界は仏の国となるであろう。仏の国は衰えることはない。また全ては宝（法華経に示される七宝など）にて飾られる土地となるであろう。宝にて飾られる地は破壊されることはない。このように国が衰えず、また大地が破壊されることなくなければ、ここに住む人々の身は安全であり、心は常に平静であるのは当然であるのだ」と法華経信仰の重要性を強調されるのです。

これらはまさしく、先にも述べた聖人の主張である「法華経受持の勸奨」と「諸宗批判」が如実に示されていた文言であり、宗教者として自然災害に見舞われた当時の情勢を何とかしなければという強い意思と、厳しい態度を知ることができるのであります。

・『報恩抄』にみる「孝養」に関するお考え

聖人は仏教者として主君や師匠、そして両親に対して、私たちと異なり大変厳しい態度を取られております。仏教において真の信仰、真の報恩を語る上で『法華三昧行法』などに説かれる「棄恩入無為 真実報恩者」という一節がよく挙げられます。これは「世俗の主君や親、師匠などから受けた恩などを捨てても仏道を習い究める者こそが真の報恩の者である」という意味です。現代において両親などに逆らい、受けた恩を捨てる事は「不孝者」の何者でもないように思われがちですが、実はそうではないのだと聖人は述べられます。ここにある「逆らう」というのは「言われたこと、教えられたことに背く」という意味ではなく、「世俗の恩に縛られることなく、仏道に邁進する」という意味であります。このことを踏まえて『報恩抄』をみますと、

仏法を習極めんともわば、いとまあらずは叶べからず。いとまあらんとをわば、父母・師匠・国主等に随ては叶べからず。是非につけて、出離の道をわきまへざらんほどは、父母・師匠等の心に随べからず。 (定本 一一五頁)

と聖人は述べられております。これは「仏法を習い究めるためには暇を止めなければ、それは叶う事はないであろう。また両親や師匠などに従って縛られるようであれば同様に仏道を究めることは叶わないであろう。生死の無常からの脱却を目指すな

らば、その願いが成就するまで両親や師匠に従ってはいはならないのだ」と示されているのです。「仏道の究明」、「覚りへの道を究める」ことこそが仏道を修学する者の最も大切な目標であり、それを求めるためには全てを排斥しなければならぬのであると述べられるのです。しかしその一方で、仏道に邁進する事により、実はその功德によって父母・師匠・主君等は救済されるのであるとされ、これこそが仏教における「真の報恩」であり、「真の孝養」であるとされるのです。

四、日蓮聖人の弟子檀越に対する想い

・書状の文体について

先に自然災害などに見舞われる当時の時勢などについて、著述より聖人の想いをみてみました。著述の文言は現代の人々にとって大変厳しい文言が並んでいます。これに対し書状には大変優しい、先にも述べました「非常に人間味溢れる日蓮聖人像」をみることが出来ます。次にこの書状にみる聖人のお姿、檀越に対する想いについて述べたいと思います。

聖人のお書きになったもの、特に書状にはその内容に特徴をみることが出来ます。具体的に挙げればそれは①供養に対する返礼と、②法華経を弘めるものとしての「法華経受持の勸奨」であります。特に②において、法華経を信仰するもののあるべき姿や、どのように人々などは救済されるのかについて具体的に、しかも釈尊伝や多くの經典の文言を通じて、人々を励まし、時には共に悲しむという宛先への温かい気遣いがあふれています。書状をしたためながら弟子檀越を心配し、その身を案じて涙する聖人のおひとがら。そして遣わされた書状を読み、涙を流し救われる弟子檀越たちの姿。人々は聖人のおひとがらを慕い、そしてその文言に「心の平安」を得ていったのではないのでしょうか。

聖人の書状の文体をみると、その文章は漢文体・和文体・和漢混淆文の三種に大分できます。これは対合衆（宛先）の社会階層やその性格、また教学理解を深く考えられた上で書を執筆されていることの証左であり、いくなれば書状を通じた「対機説法」

であるといえます。武士であり、弟子ら以上に法華経内容理解に優れていた富木常忍や大田乗明・四条金吾などの篤信者、特にそのような男性に宛てた書状の多くには格調高い漢文体、さらに荘嚴な楷書で揮毫されたものが多く現存しており、逆にいえばこのような書状を受け取っていた人物は非常に高い地位や深い教学内容理解を有していたことを知ることができます。

一方では、優美で流れるような和文体でしたためられた書状も多く現存しており、それらの多くは女性信者に宛てられたものであります。聖人には女性檀越が多く存在しておりました。その要因として挙げられるのが、末法世の人々を救う正法として、依経とされた法華経には、言わずもがな「女人成仏」が説かれている点です。しかしそれだけではなく混迷を極める世情を生きた女性檀越の心に寄り添う聖人の心が「女人成仏」を説く法華経の文言を通じて信仰者のあるべき姿を示すと同時に、現代にも通じる病の苦しみ、夫婦間の悩みや女性の子を想う母の気持ちに対する解答を書状をもって説き示されたからともいえます。

このように男性に宛てた書状には「格調高い漢文体、さらに荘嚴な楷書」、女性に宛てた書状には「優美で流れるような和文体」を使用することは、平安時代からの「書の作法」であるとされ、このような教養は『本化別頭仏祖統紀』などによれば藤原為家より習ったとされます。藤原為家は藤原為相の父であり、息子の為相は歌道の宗教の一つ「冷泉家」の祖であります。

・書状に現れる聖人の想い——富木常忍の妻に宛てた書状——

それでは実際に檀越らに宛てた書状をみながら、聖人の檀越に対する想いについて述べたいと思います。まず挙げるのが大檀越の一人である富木常忍の妻、富木女房尼に宛てられた書状です。富木女房尼は富木常忍の妻として、夫にも勝るとも劣らない法華経の信仰を持っていました。しかし病弱であったようで、体調面で大変苦勞されたことが書状から伺えます。また富木女房尼には「連れ子」が一人おりました。それは聖人の弟子であり、後の六老僧の一人である伊与阿闍梨日頂がその人です。

(一) 『富城殿女房尼御前御書』

富木女房尼に遣わされた書状『富城殿女房尼御前御書』の冒頭部分には、

はるかにみまいらせ候はねば、をぼつかなく候。

（定本 一七一〇頁）

と記されており、「久しくおめにかかつていないが、体調はいかがか」と富木女房尼の体調面を気遣っています。その後も、

たうじ（当時）とてもたのしき事は候はねども、むかしはことにわびしく候し時より、やしなわれまいらせて候へば、ことにをん（恩）をもくをもひまいらせ候。それについては、いのちはつるかめのごとく、さいわいは月のまさり、しを（潮）のみつがごとくとこそ、法華経にはいのりまいらせ候へ

（定本 一七一〇～一頁）

と、「自らは今現在、安楽に暮らしているわけではないが、以前の法難の日々を思い起こせば、その時から富木女房尼より受けた供養、また現在も引き続きご供養を受けていることについて篤い恩を感じている。それについても富木女房尼の体調が良好となり、寿命が鶴や亀のように長く保たれ、幸いは月が明るさを増し潮が満ちていくようにと、日々法華経に御祈念申し上げている」と、今までの富木女房尼からの供養に対する感謝を述べ、健やかに日々を過ごすことができるように祈っていることが記されています。

本書は先の日頂のことが記されており、まず、

さてはえち（越）後房・しもつけ房と申僧をいよどのにつけて候ぞ。しばらくふびんにあたらせ給へと、とき殿には申させ給。恐恐謹言

（定本 一七一頁）

と、熱原法難によって身をひそめた越後房・下野房を日頂につけてよこすので面倒を見てほしいと依頼しています。その後に「追而書（追伸）」の部分に、

いよ房は学生になりて候ぞ。つねに法門きかせ給候へ。

（定本 一七一〇頁）

と「日頂は大変優れた学僧となった。故に対面した際には法門を尋ねると良いであろう」と記されているのである。日頂は若いうちに聖人の弟子となりました。自らの実子を富木女房尼はいつも心配していたことでしょう。久方ぶりに子と会うだけでも嬉しくてしょうがないのが親の気持ちでしょうが、さらに書状に記される実子の成長した姿に富木女房尼の感情は爆発したのでは

ないでしょうか。この書状からは「子を想う母の気持ち」を深く汲み取る、先の書状にみえる大変厳しいお姿とは別の、非常に優しい聖人のおひとがらをみる事ができるのです。

(二) 『可延定業御書』

続いて、先の書状と同様に富木女房尼に宛てられた『可延定業御書』をみていきたいと思えます。本書は富木女房尼の病気を見舞いながら法華経の信仰を説き、「急ぎ治療すれば必ず完治する」と記される書状です。聖人は仏教者です。信仰を説く者として様々な仏教説話が記されます。しかし本書は大変現地的、かつ人の心の機微というものが示されるものとなっています。

まず、冒頭部分において、

夫病に二あり。一者軽病、二者重病。重病すら善医に値て急に対治すれば命猶存す。何況軽病をや。業に二あり。一定業、

二不定業。定業すら能々懺悔すれば必消滅す。何況不定業をや。 (定本 八六一頁)

と「病には二つある。一に軽い病、二に重い病。重病ですら良い医師に出会い、急いで治療すれば病は癒えるであろう。故に軽い病は言うまでもない。また我々の過去世からの行動が現在に影響させる働き(業)というものにも二つある。それは一に定業、二に不定業である。過去世の行いによって定まっている業ですら、よくよく懺悔すれば必ず消滅する。故に定まっている業などは日々の行いにより必ず消滅するであろう」と述べられます。日々の行いにより定まる業ですら消滅するのですから、病などは急いで良い医師と出会い、治療するべきであると富木女房尼を勇気づけながら、その治療を勧めているのです。宗教者というものはとかく目に見えないものを言いがちであるにもかかわらず、鎌倉期という医療も進んでいない時代において、非常に現実的に富木女房尼の病気に対しアドバイスを送っているのです。ここに聖人の的確な助言をみる事ができます。

さて、ここにある人物が登場します。それは先にもあげた、富木氏と同じく聖人の大檀越の一人であった四条金吾(四条頼基・中務三郎左衛門尉とも)という人物です。四条金吾は武士として江馬光時につかえていました。しかしその一方で薬学の知識に長けており、建治と弘安の交わりより体調を崩された聖人に対しても、その知識を遺憾なく發揮し薬を調合しています。そして

その薬を飲んだ聖人をして、「臨終を覚悟した病が今は一〇〇分の一になった」とその能力を賞賛するほどでありました。聖人は富木女房尼に対して、

其上最第一の秘事はんべり。此経文は後五百歳二千五百余年の時、女人の病あらんととかれて候文なり。阿闍世王は御年五月十五日、大悪瘡身に出来せり。大医耆婆が力も及ず、三月七日必死て無間大城に墮べかりき。五十余年が間大楽一時に滅して、一生の大苦三七日にあつまれり。定業限ありしかども仏、法華経をかさねて演説して、涅槃経となづけて大王にあたえ給しかば、身の病忽に平癒、心の重罪も一時に露と消にき。仏滅後一千五百余年、陳臣と申人ありき。命知命にありと申て五十年に定て候しが、天台大師に値て十五年の命を宣て、六十五までをはしき。其上、不輕菩薩更増寿命ととかれて、法華経を行じて定業をのべ給き。彼等皆男子也。女人にはあらざれども、法華経を行じて寿をのぶ。又陳臣は後五百歳にもあたらず。冬の稻米・夏菊花のごとし。当時の女人の法華経を行じて定業を転ことは秋の稻米・冬菊花、誰かをどろくべき。されば日蓮悲母をいのりて候しかば、現身に病をいやすのみならず、四箇年の寿命をのべたり。今女人の御身として病を身にうけさせ給。心みに法華経の信心を立て御らむあるべし。しかも善医あり。中務三郎左衛門尉殿は法華経の行者なり。

（定本 八六一～二頁）

と示されています。ここには「阿闍世王は大罪を犯したことにより病におかされたが、法華経によって平癒した」という説示と「陳臣というものが天台大師の講説によって寿命が延びた」また「不輕菩薩が定業を延ばした」と様々な仏教説話を記して、「ここに示した、法華経によって救済された者どもは皆男性であり、富木女房尼は女人である。法華経は女人のための經典である。時にあなたは病身である。法華経を信仰する女人が救済されないことがあるか。故に心は法華経に対する信心を強く保たねばならない」と述べ、「時にここに良き医師がいる。その者は中務三郎左衛門尉（四条金吾）であり、この者も法華経の大信者である」と教示されるのです。つまり四条金吾にあなたの体調をみてもらいなさいとアドバイスを送られているのです。このようなことは「心強く、人を想う人」であれば、皆言うことでありましょう。しかしこの次の文言に聖人の「人の心の機微」をよく理

解される、思慮深さを知ることができるとのことです。

早く心ざしの財をかさねて、いそぎいそぎ御対治あるべし。此よりも申べけれども、人は申によって吉事もあり、又我志のうすきかともう者もあり。人の心しりがたき上、先々に少々かゝる事候。此人は人の申せばすこそ心へずげに思人なり。なかなか申はあしかりぬべし。但なかうどもなく、ひらなざけに、又心もなくうちたのませ給。 (定本 八六二頁)

ここには「急いで中務三郎左衛門尉に対して、誠意を尽くして治療の依頼し、病と向きあわなければならぬ。中務三郎左衛門尉には自らも依頼しようとは思わが、人というのは様々である。人によって、時には仲介者を立てて交渉をした方がよいこともあれば、そのようにすることによって依頼する本人の誠意が薄いと思う者も少なからず存在する。自分が思うに中務三郎左衛門尉の場合は、仲介者が間に入ることによって少し面白くなく感じる人であるように思う。故に自分から依頼することはかえって具合が悪いかもしれない。今回は仲介者を立てずに、富木女房尼が心より、ただ一心に依頼するのが一番良いと思う」と示されています。四条金吾は大変篤い法華経信仰を持つ反面、非常に強情な人物であったと伝わります。同じ信仰を持つ者であっても、聖人が仲介者として入ることにより「富木氏ばかり良くしている」と四条金吾が感じてしまうと富木女房尼としては非常に良くない立場となるわけです。四条金吾の性質をよく理解し、教え導いている聖人であるからこそ富木女房尼にこのようにアドバイスをくれたのではないのでしょうか。

さらに聖人は富木女房尼に対して、

去年の十月これに来て候しが、御所勞の事をよくよくなげき申せしなり。当事大事のなければをどろかせ給ぬにや、明年正月二月のころをひは必をこるべしと申せしかば、これにもなげき入て候。富木殿も此尼ごぜんをこそ杖柱とも恃たるに、なんど申て候しなり。随分にわび候しぞ。きわめてまけじたまし(不負魂)の人にて、我かたの事をば大事と申人なり。かへすがへす身の財をだにをしませ給わば此病治がたかるべし。一日の命は三千界の財にもすぎて候なり。先御志をみみへさせ給べし。法華経の第七卷、三千大千世界の財を供養するよりも、手一指を焼て仏法華経に供養せよとかれて候はこれなり。

（定本 八六二―三頁）

と述べられています。ここには「実は中務三郎左衛門尉が去年の十月身延に來た折、あなたの体調をとでも気にしていた。そして、現在は症状が軽いことからあまりあわてていないようであるが、明年の正月から二月ごろには必ず悪化するであろうと申し立てた。さらに中務三郎左衛門尉は続けて、富木殿も尼御前（富木女房尼）を杖とも柱とも思つて頼りとしておられるのに、大変嘆かわしいとも言ひ、自らのことのように歎けいていた。あの者は非常に負けじ魂の強い人物であるが、同じ志を持つ者に対し非常に大切に想う人物である。そのことを心得たうえで、重ねて申すが、心から依頼すべきである。くれぐれも誠意のある行動をしなくてはならない。それを怠つたならばこの病は非常に治りにくくなるものである。人の寿命はたとえ一日であっても延ばすことができるならば、それは三千世界の財宝にもまさつて貴いものである。まず誠意を尽くしてそれを認めてもらうようになさるなければならぬ。法華經第七卷の藥王菩薩本事品には、三千大千世界の財宝をもつて供養するよりも、手の指一本を焼いて仏と法華經とに供養せよ。その方が功德がすぐれていると説かれており、それはこのことをいっているのであつて、何よりも誠意を示すことが大切である」と、四条金吾が富木女房尼を非常に心配しており、また富木常忍が妻（富木女房尼）を心の支えにしていることを、自分のことのように考へていふことを告げています。この言葉を聞いた富木女房尼は四条金吾に対し非常に強い親近感を覚えたのではないのでしょうか。そして再度、心からの依頼をしなければならぬと述べられるのです。先にも述べたように四条金吾の性質を熟知している聖人は、今度は富木女房尼が四条金吾を「難しい人物だ」と思わないように配慮した文言を使用して両者のあいだに入つて良い方向へと導こうとしていふように感じます。実際に仲介することはなくとも人の心の機微を熟知し導く聖人の文言は、人を想う優しさと心底を慮る懐深さを感じずにはいられませぬ。このような書状を受け取つた富木女房尼は直ぐさま聖人のアドバイス通り、四条金吾に心からの財をつくして依頼をなしたのではないのでしょうか。

本書の最後には、

いよどの（伊予殿）もあながちになげき候へば日月天に自我傷をあて候はんずるなり。恐恐謹言。 （定本 八六四頁）

と、先と同様に富木女房尼の実子である日頂も母の容態を心配して、日々闘病平癒を祈っていることが記されています。文面に示される実子の元気な様子と自らを心配する様子によって改めて富木女房尼の心は強く、そして病に対峙していこう決意を新たにしたのでないでしょうか。

五、むすびにかえて

今、私たちが眼前に拝見できる日蓮聖人の書は、七五〇年以上にわたり弟子・檀越らによって脈々と継承されてきた「信仰の証」であり、その恩恵によって私たちも救いの世界へと導かれています。そしてその書より、時空を越え、聖人の姿にまみえることができるのであります。

まず聖人がどのように人々を導いていったかを聖人の書蹟にふれながら述べました。聖人が早い筆致で一気に書を認めていたこと、そしてその想いを一気に書き上げていることを、その躍動する文字からみることができ、その書面は非常にすばらしいものであります。しかしその内容は現代に生きる私たちにとって非常に厳しい言葉がならぶものもあり、特にそれらは著述の文言より指摘しました。まさしく「世間の法に染まらざること、蓮華の水にあるがごとし」の経文通り、仏教と世法の違いをありありと示す聖人の文言は我々を考えさせる非常に重いものであります。しかしこのような文言が厳しい「聖人像」を形作っている反面、書状には非常に人間らしい一面をみることができました。子を想う親の気持ちや、そして病に苦しむ人の姿を聖人は宗教者としてだけでなく、一人間として受け止めて人々を導いていたことは現代に生きる我々にも多く通じるものがあり、我々はこのような点も自らの指針としなければならぬと思います。

「はじめに」にも述べましたが、様々な書に鏤められた聖人の「言葉」こそは、日蓮教学の根幹であると同時に、聖人その人であり、接する者の多くを深い感動に浸らせます。著述に代表される、強く信仰を説く激しい文言の一方で、書状に現れる檀越の心

に寄り添う聖人の「おひとがら」は、その書面が見事に映し出しており、「人間・日蓮」が現代に燦然と姿を現されるのであります。我々は信仰を受持すると同時に、この文言に救われながら「現代を生きる指針」としなければならぬのではないのでしょうか。